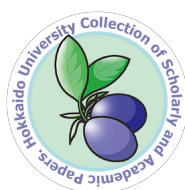




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラインドマラソンの社会学的研究（その2）：ブラインドランナーの〈視覚〉の社会的構成
Author(s)	植田，俊；山崎，貴史
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，138，407-426
Issue Date	2021-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.138.407
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82162
Type	departmental bulletin paper
File Information	23-1882-1669-138.pdf



ブラインドマラソンの社会学的研究（その2）

ーブラインドランナーの〈視覚〉の社会的構成ー

植 田 俊*・山 崎 貴 史**

【目次】

1. はじめに
 2. 先行研究の検討と本研究の方法
 - 2-1. 視覚障害者スポーツにおける〈視覚〉研究
 - 2-2. 視覚障害者スポーツの身体論
 - 2-3. 本研究の視点と対象
 - 2-4. 本研究の調査方法
 3. 調査結果
 - 3-1. ブラインドマラソンにおける「見る」こと
 - 3-1-1. 動かないモノの情報
 - 3-1-2. 動くモノの情報
 - 3-1-3. ブラインドマラソン空間の「見え方」
 - 3-2. ブラインドマラソン空間への対処
 - 3-2-1. 時間情報と空間情報の取得によるリスクの回避
 - 3-2-1-1. 伴走者からの声がけによる情報収集
 - 3-2-1-2. ランナー自身の身体を通じた情報収集
 - 3-2-2. 時間情報の空間情報化
 - 3-2-3. 時間情報への対処委託
 4. 結論
- 付記
注
参考文献
- 【キーワード】 ブラインドマラソン, 〈視覚〉の社会性, 動く情報, 動かない情報

1. はじめに

我が国における「障害者スポーツ」¹の普及・発展は、未だ更なる振興可能性を残している。笹川スポーツ財団（2018）の調査によれば、過去1年間にスポーツ・レクリエーションを実施した障害児・者は7～19歳が29.6%, 20歳以上の成人が20.8%である。その中でも、本稿で取り上げる視覚障害者は、過去1年間のスポーツ実施率が45.8%（内、男性52.3%, 女性38.2%）、非実施者は54.2%となっており、比較的高い値を示している。また、同調査による現在のス

* 東海大学国際文化学部・講師

** 北海道大学教育学研究院・講師

ポーツ・レクリエーションへの取組に対する視覚障害者の意識調査の結果をみると、現状のスポーツ実施に満足している割合が18.6%、スポーツを行なっているがもっと行いたいという割合が16.3%、スポーツを行いたいと思うができないという割合が22.3%、特に関心がない割合が42.8%となっており、他の障害のある人々と比べてさらなる愛好を希望する者の割合が最も多く、反対に関心のない割合が最も少ない。この傾向は、障害の程度が重度になるとより顕著となり、重度視覚障害者の意識は、スポーツを行なっており現状に満足している割合が19.2%、スポーツを行なっているがもっと行いたいという割合が17.3%、スポーツを行いたいと思うができないという割合が32.7%、特に関心がない割合が30.8%となっており、実施意欲はあるがそれを実現できない何らかの障壁があると理解できる（植田・山崎, 2020, p.54）。

こうした課題を乗り越えるべく、従来の障害者スポーツ研究は、障害者個々の関心・適性・身体状況などを踏まえ、障害者が自主的・積極的にスポーツができるよういかなる支援ができるかという問いのもと、障害者によるスポーツ実践の実態の解明を進めてきた。その成果から、施設整備、イベント等の機会の充実、クラブ・指導者・ボランティア等の育成の推進が提言されてきた（藤田, 2013; 松尾・平田, 2019; 田引, 2020）。

筆者らも、既存の障害者スポーツ研究の問題意識を共有するものである。しかし、支援のあり方を考えていく上で重要となるのは、「障害」がスポーツ実践の場面においてどう発現するのか、すなわち視覚障害の場合、スポーツ実践において「見えなさ（にくさ）」がどのような問題となって発現するのか、その現実を捉えていく必要があると私たちは考える。なぜならば、視覚障害者が日常生活の中で行う様々な活動や行為（スポーツを含む）は、この「見えなさ（にくさ）」によって大いに規定されているからである。

よって本稿では、ブラインドマラソンを事例として、ランナーにとって視力の低下や視野の狭窄がランニング実践の場面においてどのような支障として生じる（＝障害となる）のか、またその障害にどう対処するのか、そもそも視覚障害者はプレイ中にランニング実践空間をどう捉えているのか、といったブラインドマラソンにおける〈視覚〉のあり方を明らかにする。

2. 先行研究の検討と本研究の方法

2-1. 視覚障害者スポーツにおける〈視覚〉研究

本研究を進めるにあたって、踏まえるべき研究成果は「視覚障害者スポーツ研究」領域に多く蓄積されている。既存の先行研究には以下のような知見を提供するものがある。それは、1) 視覚障害者スポーツの競技内容に関する研究、2) 視覚障害者スポーツの実態（人口、実施頻度、動機など）に関する研究、3) スポーツに取り組む視覚障害者への支援の実態に関する研究、4) 視覚障害者スポーツの競技指導や教育的意義に関する研究、5) 視覚障害者の「視力」とスポーツに関する研究、である。

1) では、ブラインドサッカーやブラインドマラソンなどといった、視覚障害者特有のスポーツ競技の実施内容や健常者スポーツとの内容の違い、実施上の留意点などが報告される。2) では、現在スポーツを実施している視覚障害者の実態について、人口や実施頻度、取り組むきっかけ・動機などが主に質問紙調査を通じて明らかにされている。3) では、健常者が障害者に対して行っているボランティア等の支援内容やそれに関わるようになった動機、視

覚障害者と健常者のスポーツにおける関係などが明らかにされている。4) には、スポーツを実践することによる視覚障害当事者に生まれる教育的効果や、より高い教育的効果を上げるための指導方法を検討した研究がある。5) は、視覚障害者の「視力」とスポーツ実践の関係を医学・生理学的に分析する研究である。この中で、本研究を進めるにあたって特に多くの示唆が得られる研究は、1), 3) および5) である。

例えば、スポーツにおいて必要な目の能力を「スポーツビジョン」と呼び、その役割の大きさを指摘したのは正化（2002）であり、「スポーツの場での目の役割は非常に大きく、（中略）眼が見えなくなってしまうとほとんどの競技をすることができなくなってしまう。われわれはスポーツをする際、おそらく99%以上の情報を目から得ている」（正化, 2002, p.1）という。李（2008）は、先行研究や指導の現場では「視力＝モノの形を見分ける能力」が重視されているが、視野や色覚、両眼視や調整力も含めた視機能で視覚障害者の支援のあり方を検討すべきであると述べている。また、視覚障害者がスポーツを行うための指導と支援のあり方を検討した香田（2014）は、「視覚以外の感覚ではそれら（聴覚、触覚、筋感覚など：筆者注）を駆使しても、視覚情報を全て補うだけの情報獲得は困難」（香田, 2014, p.121）であると述べ、視覚障害者がプレイ中の情報収集や状況理解を的確に行ってスポーツを実践するためには、視覚障害者以外からの支援が重要となることを示している。また、高戸（2013）は、視覚障害者は目の前の状況を理解する際に、身体図式と空間図式を組み合わせ「地理的空間認知」を構成し用いていることを指摘している。その際に、白杖や盲導犬や電子歩行補助器具を活用することで、視機能の代わりに「音源定位」という方法によってそれが実現可能になるという。

これらの研究は、視覚障害者の目をもつ実際の視力（＝見えなさ）を前提として、それを補うための支援のあり方を検討・提示している。すなわち、視覚障害は健常者の支援によって補うことが可能であり、支援を行う健常者にとって、視覚障害そのものを理解することと視覚障害者に対する運動指導のあり方を検討する上で大変示唆的であると言える²。

しかし、全力疾走が必要となったり、自分以外のプレーヤーの位置が常に入れ替わるといった激しい状況変化が起こったりするスポーツという活動における視覚障害者の「見えなさ（にくさ）」は、日常生活の時と同じような「見えなさ（にくさ）」として経験されているのだろうか。それとも、視覚障害がスポーツの場面特有の問題となって現れるのだろうか。

日常生活における単独での歩行や移動といった生活に欠かせない行為・行動のために活用される、白杖や盲導犬、電子歩行補助器具は、活動の種類や強度が異なる特異な活動であるスポーツ実践場面において用いることは現実的ではない。プレイする選手に求められる状況把握の内容が日常生活とは大きく異なるからである。また、柱や壁などの位置やそれと自分との距離を図るために有効とされる音源定位については、刻々と変化する状況を把握し次の展開を予測することで競争における勝利や記録の達成を目指すスポーツにおいて、日常生活とは異なる方法が求められると予想される。

こうした日常生活やスポーツ場面における視覚障害の現れ方の異同は、障害者によるスポーツ実践の支援のあり方を検討するための前提といえるものである。しかし、先行研究では、「アダプテッド・スポーツ」という考え方をベースとして、スポーツのルールや用具を障害の種類や程度にいかに対応（adapt）させるかという対処や支援の具体的方法やその独自性は明らかにされてきたが、適応対象とされる「障害」がスポーツにおいてどのように発現

しているのかは問われてこなかった。つまり、「本来のスポーツのもつ本質を可能な限り損ねることなく」(植木, 2017, p.4), 「障害のある人にも実施可能」(藤田, 2013, p.13) なスポーツ形式の工夫や改変のあり方が問われてきたといえる。いうなれば、「障害者スポーツの特異性」は説明が進んできたが、「スポーツにおける障害の特異性」は議論と検討の余地が残されている。

2-2. 視覚障害者スポーツの身体論

こうした先行研究に対して、障害者スポーツを『「障害があってもできるスポーツ」ではなく、『障害があるからこそ出てくる体の動きや戦略を追求する活動』と見なす』立場から議論を展開しているのが伊藤(2016)である。伊藤は、障害者スポーツの特徴を、ルールや道具の工夫ではなく、動き方そのものの原理の違いに見出している。その違いとは、「空間の人工性」「ゲームの条件としての『視覚なし』」「目の見える人との関わり」の3点である。

1つ目の「空間の人工性」とは、街や家の中など、基本的には個人がそれぞれの目的や思いに従って自由に動き回ることのできる日常生活の場とは異なり、スポーツの空間は地面や水面が線やロープで区切られ、明確なルールによって行為・行動が規定されている「圧倒的に活動の自由度が低い空間」であるという意味である。日常生活の場のような人工性の低い(=自由度の高い)空間においては、目が見えにくいことで「予期」³が成り立ちにくくなる。一方で、スポーツの空間は予期しにくさが相対的に低く、想定外の出来事の発生に身構える必要が少ない空間である。その結果、街中と比べて安全であることが保障されるため、状況把握のための情報収集にかかる意識を手放すことができる。と同時に、決められた範囲やルールはそれに基づいて行うことができる行為の選択肢や幅を限定している。よって、個々人(相手や仲間)の思惑や意図を読むということがスポーツの面白さとして生まれることになる。これは、受動的な対応である予期に対して、能動的な対応としての「予測」ということができる。

2つ目の「ゲームの条件としての『視覚なし』」とは、視覚を使わないことを加味してなされているルール上の配慮が「ハンデ」ではなく、異なる技術や戦術が新たに求められる「制限」として捉えられるという意味である。例えば、陸上競技において、直線やカーブを走るためには共に走る伴走者が必要になる。進むべき方向の指示やロープ等の誘導によって決められたコースを走行することが可能になるからである。しかし、伴走者と視覚障害者が共に走るためには、腕の振りやそのリズム、歩幅といったピッチをお互いに合わせる必要がある。ブラインドサッカーやゴールボール、ブラインド卓球などでは金属の球や鈴が入れられた音が鳴るボールを使用する。それは、見えない人もコートの中でボールを扱えるようになるための配慮が必要だからである。しかし、そのことによって「音を出さない」ことや「他の音に紛れさせる」といったフェイントなどの新しい技術が生まれることになる。この点において、目の見える人のサッカーとは異なる技術が要求される「新しい競技」としてのブラインドサッカーが成立することになる⁴。

そして3つ目の「目の見える人との関わり」とは、視覚を使わないスポーツにおいて目の見える人が果たす役割についてである。それは、見えないアスリートの「目」になることである。例えば競泳では、壁との正確な距離を視覚で認識できないスイマーに対して、目の見える人がタッピングする役割を担うことによってターンのタイミングを教える。他にも、習得すべ

き技術を視覚的に得ることができないが、目の見える人からのアドバイスやフィードバックによって技術のブラッシュアップが可能になったり、ブラインドサッカーにおいて、目の見える選手がつとめるキーパー、監督、コーラーが声を出したりボールを叩いたりすることで選手がゴールの位置やコート内における選手自身の位置を認識できるようになったりする側面がある。目の見える人によるコールの内容や音の出し方、タイミングなどによって選手のプレイの良し悪しやチームの勝敗が左右される。このことは、目の見える人も事実上プレーヤーの一人になることを意味する。

伊藤は、こうした原理の違いが帰結する障害者スポーツ選手の身体（＝パフォーマンスや状況の知覚）を「関係の中にある身体」と捉えている。すなわち、視覚障害者の目の役割を、目が見える人へと委ねることがスポーツを実践可能にする手段になるのみならず、プレイしている状況の把握・認識のあり方（＝見え方）や、それへの対処結果としての選手自身のパフォーマンスの良し悪しをも左右するというわけである。身体を「関係」として捉える伊藤の視点は、「スポーツにおける障害の特異性」を理解する上で大変示唆的な議論といえるだろう。

しかしながら、本研究は伊藤の「関係の中にある身体」論を踏まえつつも、制限（＝障害）がある中で生み出される人々を驚かせるアスリートのパフォーマンスの「すごさ」ではなく、選手たちのパフォーマンスのあり方を規定する制限としての「障害」そのものにフォーカスしたいと思う。なぜならば、確かに伊藤がいうように目の見えないアスリートのプレイは目を見張る「離れわざ」というべきものであるが、私たちが彼らのプレイを見て驚く1番の理由となっている目の「見えなさ（にくさ）」は、スポーツの中では制限と見なすことができるかもしれないが、そこを離れて日常生活に戻れば、当事者にとってはやはり「障害」になるからである。伊藤自身も述べているが、例えばサッカー選手は試合が終われば手を使うことができるが、目が見えない人は試合が終わっても見えるようにはならないし、それは本人の意思で選んだわけではない（伊藤, 2016, p.42）。その意味で、視覚障害者が抱える「見えなさ（にくさ）」というのは、日常生活とスポーツの間で連続性を持っているといえる。

既に述べたように、スポーツを実施する高い意欲を持ちながらそれを実現できていない視覚障害者が多いという現実がある。この課題を乗り越えるために、視覚障害者が日常生活の中で行う様々な活動や行為（スポーツを含む）を大いに規定する「見えなさ（にくさ）」のあり方を解明することは非常に重要であると私たちは考える。なぜならば、現在視覚障害者によって実施されているスポーツの多くが、「見えなさ（にくさ）」による影響が相対的に少ないと思われる種目に集中しているからである⁵。スポーツの場面においてこの「見えなさ（にくさ）」がどのような形で発現するかが明らかになることで、求められる支援の具体的内容や方法が検討できるようになるはずである。それが進展することによって、「見えなさ（にくさ）」がスポーツ参画を妨げる要因となっていた人々の不安や懸念が払拭される可能性が拓かれると考える。

2-3. 本研究の視点と対象

以上より、本研究は伊藤が提起した視覚障害者のパフォーマンスや状況認知を「関係」として捉える視点を基にしながら、スポーツの中における制限としての障害のあり方を解明する。すなわち、事例としてブラインドマラソンを取り上げてブラインドランナーの〈視覚〉

が伴走者との相互作用によっていかに構築されているか、すなわち〈視覚〉の社会性を明らかにする。

この競技の最大の特徴は、視覚障害者ランナーがガイドランナーと一緒に走ることができる点にある⁶。ガイドランナーの役割は、視覚障害者の目の代わりとなってランニングの方向を伝えたり障害物を避けたりすることと捉えられてきた中で（中田, 2004, p.151）⁷、ランナーがかかえる「見えなさ（にくさ）」はマラソンを行う上で伴走者によって補われるべき欠如と考えられてきた。しかし本研究では、それをパフォーマンスのあり方を方向づける「制限」（＝競技条件）として捉え、以下の3つの観点で分析を行う。ブラインドランナーと伴走者が様々な相互作用を通じて、1) いかにスポーツ実践空間を「見て（捉えて）いるのか」、2) 「見えない（にくい）」ことでどのようなことが「障害」となるのか、3) スポーツの場面における「障害」にどう対処しているのか、の3点である。以下ではまず、ブラインドランナーの〈視覚〉についての調査結果を提示した上で、上記観点から分析した結果を結論として述べる。

2-4. 本研究の調査方法

上記課題の解明を進めていくにあたって、①ランナーと伴走者がランニング中に行う相互作用の観察・記録と、②ランナーがランニング時および日常生活時に移動を行うためにどのような情報を必要とし、活用し実際の行為・行動につなげているのかについて焦点を当てて調査を行った。そのために本研究が採用した調査（データ収集）方法はフィールドワークである。

期間は、2019年7月から2021年3月現在までであり、チームの詳細および練習場所の非公表を希望するAクラブ（仮名）を対象として、クラブ活動への参与観察と所属メンバーへのインタビューを実施した。参与観察は、毎週土曜日9:00～11:30に公園内の周回コース（1周3km）で行われる練習会やメンバーが参加する大会への帯同、およびランニング練習以外の活動（市内ウォーキング、音楽鑑賞会、懇談会など）にて、報告者たちもクラブ会員および「伴走者」となって実施した。参与観察中に行った伴走では、走行中に伴走者とランナーが行なっている相互作用（コミュニケーション）を、アクションカメラ（GoPro社、HERO8）を使用して記録するとともに、他の伴走者とランナーの組に帯同しながら同データの記録を行った。またインタビューは、主に土曜日の練習後に2～3時間程度実施した。今回の調査では10名の視覚障害者ランナーにご協力をいただいた（表1）⁸。

表1 本研究の調査対象者

対象者	属性	ランニング歴	障害の概要
A	60代、女性	15年	中途弱視
B	70代、男性	30年	中途全盲
C	30代、男性	4年	中途全盲
D	30代、男性	3年	先天全盲
E	30代、男性	5年	中途全盲
F	50代、女性	20年	中途弱視
G	50代、男性	4年	中途弱視
H	60代、女性	5年	中途弱視
I	40代、男性	15年	中途弱視
J	30代、女性	2年	先天全盲

3. 調査結果

3-1. ブラインドマラソンにおける「見る」こと

ブラインドマラソンとは、視覚障害者が行うマラソン競技である。障害の程度によって伴走者と一緒に走ることができるという点において目の見える人が行うマラソンとは異なるが⁹、それ以外の条件は一般的なマラソン競技と同じく、決められた距離を満たすコースを走り、順位やタイムを競うスポーツ種目である。『日本陸上競技連盟競技規則』によれば、フルマラソンは「道路競争」に区分され、その名の通り一般道路を使用して行われる。レースのスタート、フィニッシュ、その他のいかなる区間も、芝その他の未舗装路で行うことができるとされている。スタートとフィニッシュの2点間における直線の距離は、そのレースの全距離の50%以下に設定され、誤差は42m以下、コース高低差はスタートとフィニッシュ地点の2点間の標高の減少が全体として1,000分の1km (0.1%) を超えない（=1kmあたりの減少が1m以内）という基準を満たして設定された42.195kmのコースとなる（日本陸上競技連盟, online）。

このようなコース設定条件に基づいて行われるマラソンやその練習としてのランニングを行う際、視覚障害があることによって予期することが難しくなることがある。それは、1) 走すべきコースの形状や方向、2) 路面状況、3) 他のランナーや公園利用者の存在などランニングが妨害される可能性のある要素、である。これらは、決められたコースから外れず走り続けたり、転倒や他の歩行者・ランナーとの接触などによるケガを予防したりしてランニングそのものを楽しむために重要となる予期といえるが、それを可能にするために必要となる情報がある。それがランニングにおける「動かないモノの情報」と「動くモノの情報」である。

3-1-1. 動かないモノの情報¹⁰

ランニングにおける「動かないモノの情報」とは、「季節・天気を変えず変わらないもの」のことである。具体的には、コースのカーブの方向や角度、昇り降りの斜度や長さ、建築物や車の音、コース沿いに生えている木々や広場、スタートからの距離などコース上の自分の位置を理解するための目印となるものや、路面の凹凸や段差、コンクリートの裂け目といったコース上の形状など、現在自分が走っている場所の状態を把握するための情報が該当する。

写真1は、Aクラブが毎週の練習を行なっている公園の周回コース2km地点である。公園内には川が流れており、橋がある。この場所が近づくと水が流れる音が聞こえてくる。また、橋を渡った後にコースが複数に分岐していて、公園内でも多くの人が行き交う場所の一つとなっているので、他の利用者の気配や足音、話し声なども合わさって聞こえてくる場所である。

写真2は、同じ公園内コースの中で最も一般道路に近い場所である。この場所は写真内右手に見える木々の向こうに交通量の多い道路があり、ランナーたちには車の音が聞こえてきたりそれが次第に大きくなったりする場所として捉えられている。

両方の場所とも、決まった場所にくると同じように聞こえてくる「音」の変化によってコース上の自分の位置が分かる場所となっている。



写真1



写真2

写真3は、周回コース1km地点である。この場所は、スタートから約800m地点から始まる上り坂の途中にあり、周回コースの中で最も傾斜が大きくなる場所である。ランナーたちにとっては、傾斜の変化に伴う足への負荷や呼吸の乱れが大きくなって身体が「キツク」感じられるようになる場所である。また、上り坂頂上方面に向かって左手10時の方向に広場がある。距離表示の看板の手前まではコースの両側に背の高い木があるため、1km地点に到達すると左側から聞こえてくる音が変わる場所でもある。

写真4はスタート地点200m手前の、車で公園を利用しにくる人々の駐車場前である。地中に埋め込まれているトイレの排水パイプや自動販売機に引かれている電線設備が集中しており、また橋のつなぎ目の段差や路面の凹凸が多くあり、ランナーたちは足の裏でこの場所にさしかかったことを感じられる場所である。コース上で足元が一番不安定になる場所であることに加えて、公園入口に最も近い場所のため、公園利用者が一番集中するので、ランナーたちが口々に「一番神経を使って疲れる」と言う場所である。

両方の場所とも、コースの傾斜やカーブの角度、路面の段差や凹凸を「足の裏」で感じることによってコース上の自分の位置が分かる場所となっている。

このように、「動かないモノの情報」とは、その位置や形状を変えることなく公園内およびコース上にあり続けるモノに関する情報であり、その意味で「空間情報」¹¹と言い換えることができる。



写真3



写真4

3-1-2. 動くモノの情報

一方、ランニングにおける「動くモノの情報」とは、「時と場合によって変化¹¹するもの」のことである。例えば、練習前日に強風や大雨等があると、午前中の練習時までには片付けが終わっておらず、落ち葉や枝が転がっている場合があったり大きな水溜りが発生していたりすることがある。また、曜日や時間によっては他のランナー、歩行者、ベビーカーなど比較的緩やかなスピードで移動するものや、自転車やローラースケート・スキー、公園内整備車など高速でコース上を移動しているものと遭遇することがある。これらは普段コース上にはなく、不定期かつランダムに現れるものである。

写真5は、練習日前日が暴風雨だった時のコースの様子である。枝や落ち葉がコースを一部塞いでしまうことで、普段とは異なるコースを走らざるを得なくなったり、同じコースでも印象が全く変化したりすることがある。Aクラブの練習場所は、木々にあふれた自然豊かな公園であり、天候の影響を受けやすい。秋は落ち葉で路面が滑りやすくなるとともにアスファルトの路面と芝生の境目が判別しにくくなり、それを目印にしてランニングを行うランナーにとっては大きな影響となる。冬季期間は降雪のために、路面が全く変化してしまうとともに色の違いによる空間把握が大変難しくなることから、屋外での練習が困難になる¹²。

写真6は、公園を利用する他の歩行者やランナーである。Aクラブの練習場所である公園は市内各地からのアクセスが良く、休日は多くの利用で賑わう場所である。写真にあるような、同じ方向に向かって走る親子連れのみならず、ランナーたちの進行方向とは逆に向かって高速でランニングする学生や自転車が走っていることもある。

このように、「動くモノの情報」とは、天候や季節、曜日や時間、場所などによって変化するコース上の環境に関する情報であり、自然環境の変化や利用者の増減に左右されるものであるとともに、自分たちの近くを通り過ぎて行ったり、場所を通過したりすることによって状況がまた変化していくものである。その意味で「時間情報」と言い換えることができる。これは、より良い記録や走行可能距離を伸ばそうとするランナーにとって、練習や実際のレースに集中するために対処することがより重要になるものである¹³。



写真5



写真6

3-1-3. ブラインドマラソン空間の「見え方」

視覚障害者ランナーは、ランニングを楽しむために練習やレースで走るコース上にある

「動かないモノの情報」と「動くモノの情報」を得て、それを蓄積し、組み合わせて配置することによってコース全体における自分が走っている現在位置や場所の状況をイメージしている。その際により重要となるのは「動かないモノの情報」である。

毎週土曜日、同じ公園を数周する練習を行なっているブラインドランナーたちは、コースの形状や自分の位置などをよく理解できている¹⁴。その際、傾斜角度や曲がり具合といったコースの形状や、川の水音などの風景音などのランドマーク情報をもとにコース上の自分の位置と自分が今走っているコースをイメージしている。例えば、2km地点の直前に橋がある。その手前には1.5km地点から下り坂が続いており、また橋の手前200m地点からはコースが直線となる。ランナーたちは「上り坂の頂上に到達した後1.5km地点を過ぎてからの、『下り坂から直線へ』という展開で、大体自分の走っている場所は分かります」(Bさん、2020年8月22日)という。また、橋の下を流れる川の水音や、橋の手前の右90°カーブにさしかかる箇所に、降雨後に大きな水溜りができるようにくぼみがたくさんあり、地面の凹凸が増えることを感じ取ることで場所が理解できるという。このように、コース上の自分の位置やその場所の形状や曲がりなどをイメージするために活用されているのが、傾斜やコースの形状、川の水音といった、季節や天気によらず存在しつづける「動かないモノの情報」なのである。コース上の凹凸や橋とコースのつなぎ目などは、安全なランニングを阻害する重大な障害になりうるが、「変わらずそこにあり続けるもの」として捉えれば予測可能になり、かつランドマークとしても機能させうる情報となる。こうした情報を元に、ブラインドランナーたちはコースを空間イメージとして捉えていく。

毎週練習が行われるコースにおけるカーブの角度やコースの傾斜、路面の凹凸は、降雪のために屋外練習が休止となる冬季期間を除いて、毎回同じタイミングでランナーに経験される。しかし、それを毎回、受け身的に対処しては、そのために必要以上のエネルギーを費やしてしまいランニングを楽しむことが十分にできなくなってしまう。そこで、負担のかかる対処を手放すために、走る度に蓄積されていく「動かないモノの情報」を元にしてコースの特徴や構造をあらかじめ理解しておくのである。いうなれば、「動かないモノの情報」(＝空間情報)を得ることによってコースの形状や心地よいランニングの支障となる障害物の位置を「見ている」ということができる¹⁵。

3-2. ブラインドマラソン空間への対処

ここまで述べてきたように、「動かないモノの情報」と「動くモノの情報」が混在して存在しているのがランニングコースである。ブラインドランナーにとってランニングコースとは、そのままであれば予期が成り立ちにくい空間である(伊藤, 2016)。この二つの情報を目で見て得ることができないので、何らかの方法でこの二つの情報に基づいて生じる支障へと対応しなければならないわけである。ランナーたちは実際に、「動かないモノの情報」を元にコースを「見ていた」が、コース上にあるランナーにとって支障となるものに対処することができてはじめて、ランニングに集中することができるようになるのである。

では、ブラインドランナーが実践している対処とはどのようなものか。それは、1) 伴走者から提供される「時間情報」、ないしは自分の身体を通じて得られる「空間情報」をもとにリスクを回避する方法、2) 時間情報を空間情報化する方法、そして3) 時間情報への対処を伴走者に委託する方法である。

3-2-1. 時間情報と空間情報の取得によるリスクの回避

一つ目は、「動くモノの情報」すなわち時間情報と、「動かないモノの情報」すなわち空間情報を得ることで、コースの情報を把握するとともにイメージを構築するという方法である。いうなれば、成り立ちにくい予期を時間情報と空間情報の取得で補うことである。そのためにランナーが活用する方法は二つある。一つは、伴走者が発する声がけを頼りに情報を収集することであり、もう一つが、ランナー自身の身体を通じて情報を収集することである。

3-2-1-1. 伴走者からの声がけによる情報収集

実際にAクラブで行われている「動くモノの情報」に関する声がけとして、次のような例をあげることができる。普段はコース上にないものがある場合、落ちている位置や量、物の状態が知らされるとともに「前方30m先に太い木の枝が落ちているので数歩左によって避けましょう」などと声がかかり安全な走路に誘導されていく。また、曜日や時間によっては他のランナー、歩行者、ベビーカーなど比較的移動スピードが緩やかなものや、自転車やローラースケート・スキー、公園内整備車など高速で移動するものがコース上を移動している時もある。ランニング方向と同方向後方から迫ってくる場合は、音が聞こえてきた時点で例えば「後方右側から自転車が来ています。左に数歩寄りましょう」などという声がかかり、物体が通り過ぎた際に「今通過していきましたのもう安全です」などと声がかかる。前方から物体が迫ってくる場合は、後方の場合よりも早く接近してくることになるので、可能な限り早めに位置や向かってくるスピードなどが知らされる。しかしながら、時と場合で変化するこの「動くモノの情報」はランナー自身では捉えにくいものであり、ランニング中のリスクを高める障害となる。このリスク回避のためには伴走者の発信する声がけを聞いて、既存の「空間イメージ」に情報を加えていくことでランニング当日のコースをより具体的に捉えていくことが有効となる。

もう一つの、「動かないモノの情報」に関する声がけの例としては次のようなものがある。Aクラブのランナーが練習を行う公園には、普段車止めの柵が固定されている場所（写真7・8）があり、地面に柵を差し込む穴が空いていて凹凸が見られる箇所が多い。そこを通過する際には「あと10mで路面の凸凹があります」「路面がガタガタします」といった声が、当該箇所を通過する前にかかる。それによってランナーは、地面の凹凸に対応できるような足はこびや心構えを事前に準備でき、つまづきや転倒を防止できるようになる。他にも、「5cm幅くらいの橋のつなぎ目があります」「水溜りができるくらいのくぼみが連続します」「水道管が通っている箇所を通過します」「この先降り終わった後すぐに昇りになります」といった声がけが行われる。こうした声がけには決まった言葉使いはないが、練習開始前や練習中に「地面の凸凹があった場合は〇〇というように声がけしますね」というように、ランナーと伴走者の組み合わせごとに、事前に個別の伝達方法の共有が行われている。

こうした「動くモノの情報」「動かないモノの情報」に関する声がけが不十分になると、リスク回避がままならなくなる。そうするとランナーは、常に「突然転倒するかもしれない」「人や物体との急な接触で痛い思いやケガをするかもしれない」という気持ちを持ちながら走ることとなり、ストレスがかかったままランニングに集中できない状態になってしまう。そのため、この2つの声がけはブラインドマラソンを構成する非常に重要な要素といえる。これらは、ランニング時の安全性、効率性、競技性を高めるための声がけともいえる¹⁶。

3-2-1-2. ランナー自身の身体を通じた情報収集

以上のように、ブラインドランナーたちは伴走者から得られる情報を元にコースを「空間イメージ」として捉えているが、このプロセスの完遂にはもう一つ、重要な情報源がある。それは「自らの身体」である。視力に頼ることのできない先天全盲のランナーたちに特に顕著であるが、耳（聴覚）、鼻（嗅覚）、肌・足の裏（触覚）などの視覚以外の感覚を用いて得られるコース情報や、実際にコースを走ることによって得られる経験を重要な情報源とするのである¹⁷。本研究での聞き取り調査によれば、視覚以外の感覚の中で最もランニングに重要なのは足の裏の感覚（触覚）であるという¹⁸。

足の裏は、ランニング中もっとも活用される運動に不可欠な部位であり、傾斜、段差、凹凸、裂け目などを捉えることのできる情報のレセプターとして機能している。しかし、重要なのはこの力は決してはじめから万能というわけではないという点である。あるランナーによれば、「我々のように目が見えないと他の感覚が研ぎ澄まされたり、発達したりして目で見なくても『見たかのように』理解できると一般的には思われているようですが、そんなことはないです。色々な方法で情報を得てそれを元に徐々に理解できるようになるのが普通で、私のように25年も走っていれば誰だって分かるようになりますよ」（Bさん、2020年8月22日）。また、Bさんと同じく全盲でAクラブでのランニング歴が3年のDさんは、「私はこの公園のコースは（どんな空間なのか：筆者注）まだイメージできていない」（Dさん、2020年9月4日）という¹⁹。同じコースを繰り返し走ることによって徐々に空間イメージは構築されていくのである。



写真7



写真8

3-2-2. 時間情報の空間情報化

ブラインドランナーが実践している対処の二つ目は、「時間情報の空間情報化」である。

同じ全盲であるBさんとDさんのランニング空間の捉え方が異なっていたように、視覚以外の感覚から得られる情報が即「空間イメージ」とならないのは、視覚から得られる情報との性質の差があるからだと考えられる。大倉ほか（2014）によれば、「空間情報」は一度定位できれば変化は少なく、再度能動的に情報源に目を向ければ何度も確認することが可能という特質を持つ（大倉ほか、2014, p.65）。つまり、コースのカーブの方向や角度、昇り降りの斜度や長さ、建築物の位置や車の音、コース沿い生えている木々や広場、スタートからの距離

などの情報によって、コースのイメージを構築することができ、それを元にしてコース全体における自分の現在位置を理解するのである。また、路面の凹凸や段差、コンクリートの裂け目といったコース上の形状などの情報も合わせることで、現在自分が走っている場所の状態も把握し、ランニング時の安全性、効率性、競技性を高めているのである。

その一方で「時間情報」は一度提示された情報が再度能動的には確認し得えない（にくい）という特質を持つ（ibid., p.65）。例えば、普段はコース上にない落ち葉や枝、水溜りは、その地点を一度通過すると、ランナーからどんどん離れていくことになる。その位置を再確認するためには、走っている方向とは逆向きに切り替えして同じ場所に戻る必要があるが、ランニングの最中にそれをわざわざ行うことはほとんどない。よって、周回を重ねて再び同じ場所を通過するまで、その情報に触れることはできないということになる。また、他のランナーや歩行者、自転車やローラースケート・スキー、公園内整備車なども、一度すれ違ったり通過したりすると、再び同じ場所で遭遇する可能性の低いものである。それらから一度発せられた「音」（足音や声、タイヤの回転音やエンジン音など）はそのまま鳴り続けるものではなく、時間が経つと必ず聞こえなくなってしまうものであり、再びキャッチすることはできない「一回性」を特徴とする情報である。加えて、これらの情報は、情報源が時間とともに移動し変化するだけでなく、ランナー自身も移動することによっても時事刻々と変化する。よって、これらの情報はコース上に不定期かつ神出鬼没に現れることになり、予期することが大変難しいものである。しっかり捉えて対処しないと自分のランニングのみならず、他のランナーや利用者の活動まで阻害してしまうリスクとなるものである。

そこで、ランニングの最中は、それらが発する音を捉えたり、伴走者からの声がけによって自分の位置を基準として今どのあたりにいて自分から遠ざかっているのか、それとも自分に向かってきているのか、といった情報を掴んだりすることで対処する。その際、特に伴走者の声がけが重要である。ランナーにとって「動くモノの情報」源が発する音は自分との距離が近くなると理解することが難しいからであり、伴走者は音が聞こえる前から目で見てその動きを把握することができるからである。伴走者が事前に「動くモノの情報」をキャッチし伝達することによって、ランナーは対処の構えを取ることが可能になる。いうなれば、伴走者によってランナーへ高速で接近するリスクとしての情報の動きを低下させることができる。情報の動きを完全に停止させ固定化し、反復理解が可能な「空間情報」にまで変換することはできないが、ランナーはランニング中に伴走者との相互作用を通じて、自分にとってリスクとなる「時間情報」をある程度「空間情報化」することが可能になっている。

ランナーにとってのランニングコースという「空間イメージ」の構築は、「空間情報」の獲得と蓄積に加えて、時と場合によって変化する「時間情報」を「空間情報」へと変換してイメージの中に加えていくことでより具体性を高めていくものと考えられるだろう。その意味で、ブラインドランナーが構築する「空間イメージ」はランナーと伴走者の相互作用を通じて構築される、社会性を帯びた〈視覚〉ということができるだろう。

3-2-3. 時間情報への対処委託

しかし、ランニング中に空間イメージと伴走者からの声がけを情報として同時に処理してリスクに備えるとともに、ランニングそのものにもエネルギーを割くことは非常に難しいことである。そこで、楽しみの中心にあるランニングに集中し、リスク回避にかかる負担を

軽減するために、リスク回避そのものを伴走者に委ねるという方法もある。これは「時間情報」への対処やその処理を伴走者に全て委託し、情報処理にかかる意識を全て手放すという方法である。

例えば、先天全盲のDさんは、「ランニングのためのコース情報は全く知らない」(Dさん、2020年8月29日)という。なぜならば、DさんはAクラブの活動に参加するのは「気晴らしとリラックス」のためであり、走力向上やより良いタイムを目指して練習する目的ではないからである。Aクラブでは、練習を開始する前に伴走者の立ち位置、その日の体調や体の痛みの有無、その日に走りたい距離や周回数、希望するランニングペース、ランナーの走行時の癖、伴走方法に関する希望などを共有した上で練習を開始するのだが、Dさんは上記目的から、伴走者に対して「公園の木々や花などの景色のことや、最近経験して面白かったことを話しながら走りましょう」といつも提案しているという²⁰。その代わり、伴走者には転倒や他の利用者との接触など、ケガにつながるリスクを避けてもらうよう同時に依頼し、Dさん自身は自分の目的に集中するのだという。

また、中途弱視のAさんは「伴走ロープから伴走者の情報は伝わる」という(Aさん、2020年12月12日)。特別な声がけがなくても、伴走者がロープを軽く持ち上げたり下げたりすることで、路面に凹凸があることが分かったり、上下の段差が分かったり、左右に寄ってほしいというメッセージが伝わってくるという。Aさんが求める伴走を実現するためには、ランナーと伴走者の関係をとことん深める必要があるため、全てのランナーと伴走者の組に当てはめて考えることはできないが、ランナーがランニングにのみ集中できる一つの方法ではある。

T12クラスで日本歴代記録を持つ中途弱視のIさんは、「伴走者の声がけはランニングに集中することを妨げるので必要ない」という。Iさんの場合、条件が整った環境であれば単独走ができる程度の残存視力があり、伴走ロープを持って伴走者と走ることは、歩幅や腕振りのリズム・タイミング・幅などを伴走者にも合わせなければならず神経を使うことと、伴走者に話しかけられることで「耳にスイッチを入れる必要が出てくる」(Iさん、2021年1月21日)のために、余計なエネルギーを使うことになるので5kmごとにラップタイムを伝えるのみで良い、という。では、Iさんの場合どのような伴走を行うかという、伴走者はIさんの数メートル前を走り、Iさんはその背中を追いかけてながら走るという「追跡走」のような方法をとる。伴走者が走ったコースは凹凸や段差などが比較的少なく安全なコースと判断するのだという。Iさんの場合は、空間イメージの構築や空間認識にかかるコストまで切り下げ、予期努力を手放すことによってランニングの高度化をより図っているといえる。すなわち、ランニングに必要な情報を最低限に止めることによって、ランニングを純粹運動化していると捉えることができる。



写真9 Iさんの追跡走

Iさんの事例は極端ではあるが、三者に共通しているのは、「時間情報」を得て自ら処理することを手放

(出典：AクラブFacebookページより)

すことで、「空間イメージ」としてのコースに日々刻々と変化するリスクを書き込む必要がなくなり、ランニングに集中できるようにしている点である。この作業は、伴走者にリスク回避のタスクを積極的に委ねることによる、ランニングコースの「空間イメージ」のシンプル化とも言える。この方法もまた、ランニング目的に応じた一つの「見方（＝〈視覚〉のあり方）」といえるだろう。

4. 結論

本稿ではここまで、ブラインドマラソンにおけるランナーの〈視覚〉のあり方について明らかにしてきた。最後に、ブラインドランナーと伴走者が様々な相互作用を通じて、1) いかにもスポーツ実践空間を「見て（捉えて）いるのか」、2) 「見えない（にくい）」ことでどのようなことが「障害」となるのか、3) スポーツの場面における「障害」にどう対処しているのか、の3つの観点に沿って、調査結果を整理し結論を述べたい。

1点目は、視覚障害者はスポーツ実践空間をどう「見ているのか」という点についてである。調査から、ブラインドランナーたちは、伴走者からの、また自分の身体（耳、鼻、足の裏、肌など）を通じて得られる情報と実際に走った経験の蓄積をもとにして、コースの形状や障害物の位置・種類を含めた「空間イメージ」としてランニングコースを捉えていることが分かった。その際、特に「動かないモノの情報」（＝空間情報）として、コースの形状や障害物の位置を捉えて「見ている」と言える。

2点目は、「見えない」ことでどのようなことが「障害」となるのか、という点についてである。視覚障害者ランナーにとって、他の公園利用者やランナー、季節や天候、曜日や時間によって変化するコースの状況を捉えることは大変難しい。すなわち見えないことでリスクとなる「動くモノの情報」（＝時間情報）の予期が難しくなるのである。ランニングは日常生活よりも瞬時にかつ高速での移動を伴う運動であることから、この「時間情報」がどんどん押し寄せてやってきては過ぎ去っていき高速で更新されていくため、自分の力のみで「時間情報」を的確に捉えて対処するのは事実上不可能である。このような特性をもつ「時間情報」がコース上にあり続ける限り、ランナーにとってのリスクは解消されずに残り続けるということになる。

3点目は、上記のようなスポーツの場面における「障害」にどう対処するのか、という点についてである。これには以下の3つの方法があった。「空間情報の取得」「時間情報の空間情報化」「時間情報への対処委託」である。これらの方法は、伴走者との相互作用や自分自身の身体を通じて得た情報を元に行われるランニングの場面における障害への対処方法であった。そこでは目の見える人との「協働」が重要になる。ランニングの場合であればランニングの度に伴走者との間で行われる相互作用を通じて、情報の「動き」を止めて次に起こりうることを予期し易くすることで、リスクの低減を達成しているのである。

「道路競争」であるブラインドマラソンは、他の視覚障害者スポーツ競技とは異なり、プレイ空間の人工性が相対的に低く、日常生活の場との連続性が大きいがために、予期を手放し運動を純粋化することが難しい。そのために、他の競技以上に、目の見える人の存在は重要な意味を持つ。目の見える伴走者が、ブラインドランナーのランニング中のコースのイメー

ジの構築に欠かすことのできないプロセスの一部を担うことで、ランナーはランニングに集中して走ったり楽しんだりできるようになるからである。その意味で、ランナーの〈視覚〉は伴走者との相互作用を通じて構築される、社会性を帯びたものといえることができるだろう。

また、ブラインドマラソン空間の特徴である非人工的側面のために、伴走者の存在や役割は、プレイの成立にのみ限定されるものではないと考えられる。もちろん、伴走「技術」を高めることで、初めて組む相手ともある程度の走りを実現することはできるだろう。しかし、リスクとしての時間情報へ対処しよりランニングを楽しむためには、ランナーとの関係を可能な限り深めておく必要がある。また、ランニングの楽しみは大会などのイベント参加のみならず、日常的な練習へ参加することやランニング以外の活動に伴走者や他のランナー仲間と参加したりすることにもある。その場合、単なる技術としての伴走以上の支援が求められることになる。視覚障害者の日常生活支援との連続性が発生してくるからである。このことは、伴走者とランナーをスポーツの空間に限定された関係にとどめてはおかないだろう。本研究を通じて明らかとなった、社会性を帯びたランナーの〈視覚〉を問うことは、障害者と健常者の関係を捉えなおす切り口になるとともに、障害者スポーツの可能性を従来のアダプテッド・スポーツ論とは異なる視角から明らかにしうると筆者らは考える。

付記

本稿は、2020年度YMFSスポーツチャレンジ研究助成「スポーツにおける〈視覚〉の社会的構成に関する研究—ブラインドランナー—伴走者関係と相互作用に着目して—」の研究成果の一部である。

注

- 1) 障害者が行なうスポーツのことを指す言葉として他にも、障害者のみならず幼児・高齢者・体力の低い人の身体にスポーツの方を合わせる (adapt) 側面を強調する「アダプテッド・スポーツ」(矢部ほか, 2004, p.34) という概念や、障害のない人も一緒にプレーすることができる同じ種目の一つ (parallel) という意味を強調する「パラスポーツ」(伊藤, 2015, online) という概念がある。しかし、本稿では「障害者スポーツ」を用いる。その理由は、「障害」を、スポーツを楽しむ際の困難さとしてではなく、スポーツの面白さを構成する要素として考える立場に立つからである (金澤ほか 2003; 渡, 2007; 伊藤, 2016)。
- 2) 健常者が障害者に対して行っているボランティア等の支援内容、支援に関わるようになった動機、視覚障害者と健常者のスポーツにおける関係などを検討する「スポーツに取り組む視覚障害者への支援の実態に関する研究」(谷ほか, 2003; 香田, 2014; 香田・天野, 2007; 日野ほか, 2018) や、スポーツを実践することによる視覚障害当事者に生まれる教育的効果や、より高い教育的効果を上げるための指導方法を検討した「視覚障害者スポーツの競技指導や教育的意義に関する研究」がある (山内, 2002; 北ほか, 2003; 金子, 2012; 樋口, 2017)。これらの研究は、支援者が「できるようになるべき」こと、支援者の理想的なあり方、それを具現化する方法や手続きのあり方を解明してきた。
- 3) ここでいう予期とは、「行為の手に置かれる『ワンクッション』のようなもの」と伊藤は説明している。すなわち、行為をするにあたって「だいたいこんなもんだろう」という見通しが立ち、あらかじめ準備できるようにすることで安全かつ危険のない行為を可能にするものである (伊藤, 2016, p.23-26)。言い換えれば、「起こりそうなことに対して反射的・受動的に備える」(ibid., p.31) ことである。視覚を通じて自然と得られる情報は、この予期にとって大きな役割を果たしている。
- 4) こうした独自のゲームルールや参加規定の導入を、そのスポーツにおける記録の達成や競争での勝敗を争

- う際の「平等性」の担保とともに、そのスポーツとしての「固有性」や独自の「面白さ」が生み出される側面に注目したのは金澤ほか（2003）や渡（2007）である。「個々のスポーツの『面白さ』は、課せられた条件を戦略的に克服していく過程にある。そしてその『条件を課す』のがルールである」（渡，2007，p.25）。
- 5) 笹川スポーツ財団（2018）によれば、過去1年間に視覚障害者が実施したスポーツ・レクリエーションの種目の内訳（複数回答可）は、散歩（ぶらぶら歩き）34.6%、ウォーキング27.3%、水泳11.1%、体操（軽い体操、ラジオ体操など）11.1%、キャッチボール10.2%、ジョギング・ランニング8.9%、釣り8.3%、サッカー 8.3%、筋力トレーニング（ダンベル・自重のトレーニング）6.0%、ハイキング5.7%、野球5.7%、ソフトボール5.7%、海水浴5.4%、登山5.4%、筋力トレーニング（マシントレーニング）5.1%と報告されている。
 - 6) 障害の程度によってクラス分け（T11, T12, T13）があり、ガイドランナーと一緒に走ることが可能なのはT11（必須）とT12（単独走or伴走を選択可）である（日本ブラインドマラソン協会，online）。
 - 7) ブレイに直接健常者が関わる代表的な競技として、ブラインドサッカーやタンデム自転車が挙げられる。直接ブレイには参加しないが視覚障害者のブレイのサポートを間接的に行う水泳などの競技もある。視覚障害者だけでブレイすることが可能なゴールボールやフロアバレーボールといった競技もある。
 - 8) 調査を実施するに当たって、東海大学研究倫理委員会の承認を得た（札-007「スポーツにおける〈視覚〉の社会的構成に関する研究—ブラインドランナー—伴走者関係と相互作用に注目して—」）。
 - 9) ブラインドマラソンにおけるクラス分け及び伴走の概要は植田・山崎（2020）を参照。
 - 10) 以下の記述における写真は特別の引用表記がない限り筆者が撮影したものである。
 - 11) ここでいう「空間」とは、建築物や木々などの物体や曲角や傾斜をもつ道路が固定的に組み合わせられ配置された場所の意味で用いている。視覚障害者への同行援護論で前提とされている、以下のような認識に基づいて本稿では「空間」を捉えている。「視覚から得る情報は、人間が外界から得る情報の約80%といわれています。その主な役割は空間の情報収集であるため、視覚障害は『空間に関する情報障害』といわれています」（松井，2011，p.61）。
 - 12) 一方で、降雪のおかげで夏季期間には実施が難しいことが反対に実施しやすくなることがある。2021年2月21日にAクラブメンバー有志で、市内にある山へ登山を行なった。実登標高は約450mで目の見える人であれば約1時間程度で登頂可能だが、非降雪期間は大きな岩や太い木の幹が露出し段差だらけの道のりであり、手引きや伴走ロープによる同行援護で視覚障害者と登るには大変難しい山である。しかし、冬季期間は岩や木の根の間に雪が積もって段差がなくなり、傾斜はやや急だが比較的登りやすい斜面へと変化する。当日は、視覚障害者にスキーストックを持ってもらい、弱視者2名、全盲者2名、伴走者6名で実施し、全員が登頂できた。
 - 13) 「動くモノの情報」は同時に、気持ちよさを感じるレベルのジョギングや、ウォーキングを楽しみにする参加者にとっても重要な情報となる。なぜならば周囲の景色、季節の変化、時事の話題など運動をより「楽しくする」ための情報にもなりうるからである。この場合、この情報はランニングの快適さや集中を阻害する「リスク」ではなく、ランニングを盛り上げる「話題」となる。同じコースを使っている他のランナーの格好が暑さ対策の薄着から寒さ対策の厚着へと変化が見られたり、春先に芝生が整うと公園内の決まった場所から毎週練習する子どものラグビーチームの音が聞こえてくるようになったり、公園内の木々に新緑の新芽が見えはじめたり、赤黄に色づいたり、落ち葉が増えたりする様子が見えたりすると「季節がだんだん変わってきましたね」といった切り口から話が展開していくことになる。この場合の声のかけは、ランニングのために必要な情報提供では必ずしもなく、前日の天気や季節によって変化する状況に関する情報でもあるので「動くモノの情報」のようにも思えるが、しかし変化が見られる木々や聞こえてくる声は、木々が立っている／声が聞こえてくる場所と関連づけてランナーに認識されている情報でもある。そのため、「動かないモノの情報」提供の側面（効果）も併せ持っている点は重要である。
 - 14) 筆者らは伴走を行なっている際、スタートからの距離を伝えていないにもかかわらず、また声のかけが必要になる場所にさしかかる前に「もう少しで橋ですね。その手前で右に90°大きく曲がりますね」（Cさん，2020年8月1日）とランナーの方から先に場所の情報の話をされたり、S字カーブを声のかけや伴走ロープによ

- る誘導なしにコース通り走り切ってしまうというような出来事を何度も経験した。それについてBさんは「25年も走っていればそりゃ伴走者に言われなくても分かるようになります」(Bさん, 2020年8月22日) という。
- 15) しかしながら、今回の調査で視力の残存度合いやその程度、症状の違いなどによって、また過去に「見たことのある」経験の有無や、それができていた年齢などによって、コースの「見え方」が異なることが分かった。例えば、先天全盲のDさんは、ランニングコースを「走っている自分を、背中の方からまた別の自分が見ているように『見ている』」という(Dさん, 2021年3月26日)。一方で、病気による弱視の症状が後天的に発生した中途弱視者のGさんは、「自分が坂道を登ってるのか降ってるのか、それとも平地を走っているのか、実際あまりわからないんですよ。呼吸がキツくなったり、ふくらはぎが力んだりするのを感じて『あ、もしかして今登り坂を走ってるのかな』と予想するけれど、伴走者から情報がなければ分からないまま走り続けることになるんです」という(Gさん, 2021年3月12日)。「視覚障害」を一枚岩的に捉えられないことが示唆される。
- 16) 伴走者による声かけの方法論(指示内容とそれに対応したワード)は未だ確立されておらず、実際には伴走者の「力量」によって、ランナーにとって支援となるか否かが左右される。それをなるべく解消するとともに、ランナーと伴走者の組み合わせの偏りを無くすために、Aクラブでは伴走者はどのランナーとも一緒に走ることができるようになることが目指されている。ランナーと伴走者の組み合わせは毎週木曜日に発表されるが、ランナーや伴走者が練習会に急遽参加できなくなることが時々起こる。そうした場合でも、「誰とでも組める」ようになっておけば現場に集まったメンバー同士で十分対応ができる。これは、大会参加の時にもあてはまる。決まった日程の大会に伴走者が全員必ず参加できるとは限らないからである。よって、大会参加時の組み合わせもランダムになされる。ただし、伴走者に高い走力や伴走経験があり、ランナーを伴走するに十分な能力があることが組み合わせの前提にある。この点については、Yamasaki, T., and Ueta, S., (2020) を参照。
- 17) 弱視者は残存視力も最大限活用する。また、中途全盲者はかつて見えていた頃の「記憶」もイメージ構築のための情報として活用している。
- 18) 「音源定位」という聴覚を使った空間把握の方法もあるが、今回の聞き取り調査によれば音による空間認知はあくまでも、何度も訪れたことのある場所で「ある程度分かっている空間を認識するために有効」なものであり、全く知らない場所ではほとんど機能させられないという。その意味で、間接的に空間に触れることを可能にする「白杖」があっても、訪れたことのない場所に行くことは大変難しいという(Bさん, 2020年8月22日)。
- 19) 2020年9月4日にDさんにインタビューをするために市内で待ち合わせをして合流し、報告者が運転する車でインタビュー実施予定の場所まで移動していた時のこと、ある交差点で停止した際にDさんから「この交差点って左手に〇〇小学校がある交差点じゃないですか？実家のすぐそばなんですよ」と突然説明されたことがある。尋ねれば、道路の傾斜がやや左下りであることと道路の修復箇所の凹凸を座席の下から感じる傾きと揺れで分かるという。Dさんの実家付近ということもあり、助手席に乗ってこの道路を通る機会が多いからだと教えていただいたが、その感覚の鋭さに驚くとともに、「何度も」経験することによって視覚以外の感覚を通じた「空間イメージ」の構築が初めて可能になるのではないかと考えさせられた出来事であった。
- 20) 2020年8月29日の練習で筆者はDさんとペアを組んでランニングを行った際、練習開始直前に筆者はこの提案をDさんから受けた。

参考文献

- 藤田紀昭, 2013, 『障害者スポーツの環境と可能性』, 創文企画。
- 日野未奈子・萩原大河・金山千広, 2018, 「ブラインドマラソンの伴走者を対象としたソーシャルサポート:互

- 恵性からみた 現状と課題」,『アダプテッド・スポーツ学研究』4 (1), p.44-47.
- 樋口毅史, 2017,「視覚障害者柔道」,『Training Journal 12月号』458, pp.34-36.
- 伊藤数子, 2015,「『障がい者スポーツ』から『パラスポーツ』へ—名称変更の理由—」, online: <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/43981?imp=0> (閲覧日:2021.3.17)
- 伊藤亜紗, 2016,『目の見えないアスリートの身体論』, 潮新書.
- 金澤貴之・榎田義雄・岡田光弘, 2003,「障害者スポーツはなぜ『面白い』のか?—聾者バレーボールにおけるコミュニケーションの編成—」,『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』52, p.449-459.
- 金子元彦, 2012,「日本の障害者スポーツ指導者養成に関する一考察—1964年パラリンピック東京大会前後に着目して—」,『ライフデザイン学研究』8, pp.63-72.
- 北徹朗・堀江繁・植田恭史・中澤一成, 2003,「視覚障害者スキー指導についての事例研究—大学集中授業における事例報告—」,『運動とスポーツの科学』9 (1), pp.59-64.
- 香田泰子, 2014,「視覚障害者のスポーツにおける指導と支援」,『バイオメカニズム学会誌』38 (2), p.117-122.
- 香田泰子・天野和彦, 2007,「社会人視覚障害者におけるスポーツ活動の現場について」,『筑波技術大学テクノロジーレポート』14, pp.219-222.
- 松井奈美, 2011,『同行援護ハンドブック—視覚障害者の外出を安全に支援するために [第3版]』, 日本医療企画.
- 松尾哲矢・平田竹男, 2019,『パラスポーツ・ボランティア入門 共生社会を実現するために』, 旬報社.
- 中田英雄, 2004,「視覚障害者とアダプテッド・スポーツ」, 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編著,『アダプテッド・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論—』, p.150-152, 市村出版.
- 日本ブラインドマラソン協会, <http://jbma.or.jp/> (閲覧日:2021.3.17)
- 日本陸上競技連盟, <https://www.jaaf.or.jp/about/rule/> (閲覧日:2021.3.17)
- 大倉元宏・清水美知子・田内雅規・村上琢磨, 2014,『視覚書がいの歩行の科学—安全で安心なひとり歩きをめざして—』, コロナ社.
- 李俊哉, 2008,「障害者スポーツ参加への条件」,『臨床スポーツ医学』25 (6), p.631-634.
- 笹川スポーツ財団, 2018,『地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）報告書』.
- 正化圭介, 2002,「ものが見えるメカニズム」, 真下一策編,『スポーツビジョン—スポーツのための視覚学（第2版）』, ナップ, p.1.
- 田引俊和, 2020,『日本の知的障害者スポーツとスペシャルオリンピックス』, かもがわ出版.
- 高戸仁郎, 2013,「視覚障害者の単独移動支援技術とスポーツ活動」,『障害者スポーツ科学』11 (1), p.3-11.
- 谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵, 2003,「障害者スポーツボランティアの累計化に関する研究—活動期待の視点から—」,『体育・スポーツ経営学研究』18 (1), p.1-12.
- 植木章三・曾根裕二・高戸仁郎編著, 2017,『イラスト アダプテッド・スポーツ概論』, 東京教学社.
- 植田俊・山崎貴史, 2020,「ブラインドマラソンの社会学的研究（その1）—伴走者からみたスポーツ実践の『意味』—」,『東海大学国際文化学部紀要』12, p.49-67.
- 渡正, 2007,「車いすバスケットボールの『固有性』と『可能性』—構成的ルールとしてのクラス分けと『面白さ』—」,『スポーツ社会学研究』15, p.25-38
- 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編著, 2004,『アダプテッド・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論—』, 市村出版.
- Yamasaki, T., and Ueta, S., 2020, Sociological Study of Visually Impaired Sport (No.2): A study on the organization of daily sports activities for the visually impaired., The 2020 Yokohama Sport Conference.
- 山内賢, 2002,「スポーツにおけるバリアフリーの問題点—（その1）視覚障害者に対するスキー指導の体験報告—」,『慶応義塾大学体育研究所紀要』41 (1), pp.47-56.

Sociological Study of the Visually Impaired Sport (No.2) : Social Construction of the Blind Marathon Runner's "Vision"

Shun UETA, Takashi YAMASAKI

Key words

Blind Marathon, Social construction of the "Vision" , Spatial information, Temporal information

Abstract

This presentation reports on the findings of a study of visually impaired athletes training for, and competing in, a blind marathon with the help of a guide runner. Specifically, the study aimed to reveal the nature of vision which the athletes constructed, and the process by which this was achieved. This research was a case study of Blind Marathon practices with a specific focus on the relationship between blind runners and their guide runner counterparts, required for blind marathon. Previous studies have concluded that when visually impaired people play sport, deep communication with their supporter is important for them to understand their surroundings. However, the research to date does not actually clarify the nature of this communication, nor how the surroundings are understood by blind participants. The current study therefore set out to reveal a deeper understanding of the blind runner/guide relationship and the kind of *vision* blind runners acquire through co-running. The study focused on the interaction between blind runners and their guides both while running together and in their everyday lives. The study used a fieldwork approach and data was collected using participant observation and interviews during practice sessions and competitions, and during other activities relating to the role of guide runner.

The presenters will discuss the results of the current study relating to three areas: 1) The nature of interactions between blind runners and their guide runner counterparts; 2) The nature of the information blind runners acquire through these interactions; 3) The manifestation of *vision* constructed by the blind runners based on this information. The results revealed that: 1) Blind runners construct their *vision* for running by combining the information about the surroundings provided by their guide along with the images of the running course accumulated themselves through running practice experience thus far; 2) Blind runners aspire to construct a *vision* that enables them to prepare for risks during running that cannot be realized by themselves because they have difficulty seeing or cannot see; 3) By constructing this *vision*, blind runners are freed from preparing for unexpected dangers (passivity) and can thereby predict dangers, and in doing so run a danger-free course (activeness).